〔研究ノート〕

社会言語学と言語使用域：一般英語，専門英語と国際ビジネス・コミュニケーション

橋　本　光　憲

This thesis is intended to clarify General English (GE), Special English (SE or English for Specific Purposes; ESP) and International Business Communication (IBC) which the writer has studied from the viewpoints of sociolinguistics and registers. Also, the disciplines of semantics and lexicology have been employed. It is the writer's contention that the findings the writer made in the fields of General English, Special English and International Business Communication as detailed in the thesis will surely help develop the relevant sciences and contribute to society as a whole.

I. はじめに —— 本論の目的・方法と前提条件

1. 本論文の目的・方法

本論文は，表題にも明らかなように，論者がこれまで行ってきた「一般英語，専門英語と国際ビジネス・コミュニケーションの研究」の結論を，社会言語学および言語使用域の観点から整理・集約して，その学問的成果を広く社会に問わんとするものである。

ただし，ここでは「一般英語」，「専門英語」や「国際ビジネス・コミュニケーション」の定義や内容の検討は行わず，後に本論の中で明らかにする。

ただ，これからの議論の前提条件として，幾つかの言語学・英語学的な問題を，あらかじめ以下に提示しておこう。

2. 社会言語学 (Sociolinguistics) の定義

『英語教育用語辞典』[280] によれば，Sociolinguistics（社会言語学）は「言語が実際の言語使用において，なぜ，どのように変化するかを研究する分野。大きく分けて，広く社会を視野にいれて研究する巨視的研究 (macro-sociolinguistics) と，2 人の人間の会話のやり取りなどを研究する微視的研究 (micro-sociolinguistics) に分けられる。一方，ある言語が，地域や社会階級 (social class) によって，どう変わるかを研究する方言 (dialect) 研究や，ある言語使用者がいつ，どこで，誰と言葉を交わすかによって，その言葉がどう変わるかを研究する言語使用域 (register) 研究など，言語の変種 (variety) 研究は，社会言語学の重要な研究分野である。」とされている。

本項を含めて，関係定義は別の形で再三提起されることとなろう。

3. レジスター（登録／使用域）の定義

同じく，上記辞典 [257] の定義を引用しよう。「ある言語使用者が使用する言葉は，その目的，扱う内容，伝達手段，発信者と受信者との関係などによって異なる。こういった発話状況の条件をレジスターという。レジスターは方言と並んで言語の変種を記述する際に用いられる。方言は言葉の使用者が誰であるかによって決定されるが，レジスターは言語使用のコンテクスト／文脈がどういうものかによって決定されるという違いがある。一方で，両者には重なる部分も多く見られる。」

以下では，論者の研究に関連の強い英語学，応用言語学，意味論，語彙論などについても触れておこう。これらの項目は，社会言語学，言語使用域の問題とも深い関わり合いがあることが明らかとなろう。

4. 英語学の歴史との関連性

『英語学の歴史』[iii] によると，同書で「英語学」と言うとき，形態論，統語論を含む文法学はもちろん，音声学，意味論，語彙論，辞書編纂学をも含んでいる，としている。

また，言語学との関係では，同書 [iv] は，「科学的な言語研究が始まった 19 世紀以後の記述は，ただに英語学の歴史というよりも，むしろ，言語学

の歴史の趣を呈することとなった。英語の科学的（あるいは言語学的）研究がすなわち英語学である以上，言語学の歴史に触れることなく，英語学の歴史を記述することはできないからである」と述べている。

5. 応用英語学の側面からの考察

前項の後段の部分は，「応用言語学」というよりは，「応用英語学」と言うべきだろう。この種の著述に中田康行 (1997) がある。ここでは詳しく取り上げないが，論者が関心を持っている「意味論」に関連して，同書 [193] で，「..... 系列関係的な単語間の関係は「意味の場」，ないしは「意味分野」(semantic field) の理論として研究されて来たものである。言語の語彙は幾つかの意味領域に体系的に組織化されて，分類・把握されているものと考えられる」（意味分野の有用性）とする発言は参考になる。

また，「.....「弁別的特性」(distinctive feature) を出来る限り詳細に規定して行くこと（『成分分析』(componential analysis) と，その名詞と他の単語との統合的連結の可能性の考察（即ち，「弁別的特性」間の連結の可能性と不可能性の問題），さらには，..... 意味分野語彙の体系的把握の方法などを学習者に提示・理解させることで，言語学習・教育に大きな成果と発展が可能であるように思われる」とある。これは，語彙論研究から意味論研究に入った論者にとっては，正に「我が意を得たり」との感を深くする至言である。

6. 語彙論と意味論の関わり合い

ここで，英語学ないし英語学概論のミニマム・エッセンシャルズを提示しているテキスト『現代英語学要説』を参考に，「語彙論」と「意味論」の定義を確認しておこう。同書によれば，英語学の研究分野としては，主に下記がある，という。

英語音韻論 (English Phonology)
英語形態論 (English Morphology)
英語統語論 (English Syntax)
英語意味論 (English Semantics)
英語史 (English History)
英語語用論 (English Pragmatics)
英語談話論 (English Discourse)
英語文体論 (English Stylistics)
英語語彙論 (English Lexicology)
英語辞書論 (English Lexicography)
英語文献学 (English Philology)

さて，論者が以下で扱う諸問題に関連して，ここで上記テキストの順序に従って，英語意味論と英語語彙論については，その定義も紹介しておこう。

英語意味論・・・意味研究の歴史も永く，言語哲学の根源がここにあったと言っても良いくらいである。伝統的な意味論では，歴史的，心理的な意味の研究が中心であったが，最近では意味もまた言語構造の一環であるという見地から，理論的な研究が進められている。統語論との結びつきが強く，この両者は一体であるとする学者も多い。

英語語彙論・・・形態論が語の形成を主として扱うのに反して，語彙論は特定の語について，その歴史的な意味・用法の変化や，使用頻度，意味範囲，派生の現状などを調査研究する。これからのコンピューター時代には脚光を浴びる分野である。

後述のように三つの実用英語辞典を編み，各種の ESP (English for Specific Purposes,「特定の目的のための英語」) に取り組んできた論者としては，最も関心の高い分野である。意味論，語彙論については，今後更に深く論じることとなろう。

II. 論者の今までの研究の足取り

問題の結論付けは後にして，ここでは論者の今までの研究の足取りを明らかにしておこう。論者は，SE = Special English を研究する過程で，GE = General English の重要性に気がつき，GE の研究に立ち戻ったのであるが，議論の展開としては，GE → SE，SE の中でも BE = Business English とその他の SE といった順で，研究の集約をしてみたい。

1. GE の一考察－ BE，SE との比較において

研究面からいくと，GE と BE の共通領域を研究することは，大学レベルにおける学生の GE 能力をやや専門的な BE 学習への橋渡しをする要点を把握することであろう。

GE と BE が共通していない BE の独自領域（図 1 の (c)）については 1970 年代半ばから盛んになった英語教授法の 1 つである ESP の視点を導

入した。ここでは，ESP の定義の詳細は省略して，GE，BE，SE（BE 以外を含めて）の相関図を図 2 で描いてみた。

(1) GE の位置付け

図 1　GE と BE の相関図

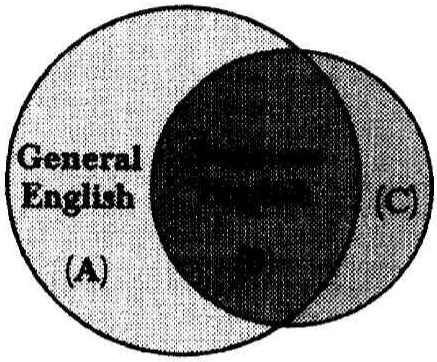
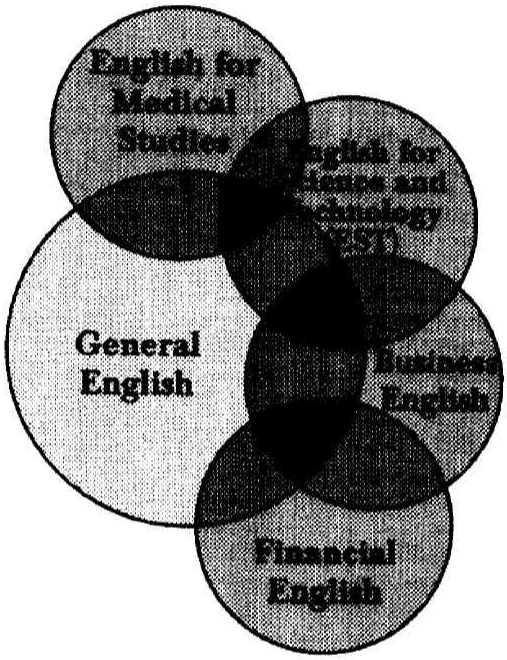


図 2　GE, BE, SE の相関図



注：GE を囲む小円は SE の諸分野であり，この他幾つかの小円を描くことができる。

内外の文献で GE に関連したものは，一般辞書，英語学・言語学専門辞典を含め，皆無といっていい。あるのは唯一，ESP の対極としての記述 — English for General Purposes (EGP, General English, GE)[1] だけである。GE という表現は，いわば「俗語」扱いなのである。

英国の大学図書館で検索すると，最終的に *General English Syllabus Design* (1984) なる一書が出てくるのみである。これは，ESP が脚光を浴びせられ勝ちな中で，もう一度基本である GE 教育に工夫を加えようとする会議の記録であるが，少なくとも書籍では単発で終わっている。

BE の方では，流石に GE 側よりは関心が高い様で，*Oxford Handbook for Language Teachers* の一冊，*Teaching Business English* (1994) が，Business English v. General English — a summary を 4 頁にわたって提供している。

(2) General English と Business English

このように Genral English という表現はあることは確かであるが，General English という言い方を余り見受けないことも事実である。その代わりと言えようか，Standard English という表現があり，英国の小・中・高レベルのカリキュラム，*English in the National Curriculum* (1995) では，Standard English を学ぶよう指導している。Standard English については次のように解説している。

> Standard English is distinguished from other forms of English by its vocabulary, and by rules and conventions of grammar, spelling and pronunciation.（p.3, 同上書）

この際，Standard English ≒ General English という見方をすれば，上記は GE の定義に通ずるものと言えよう。

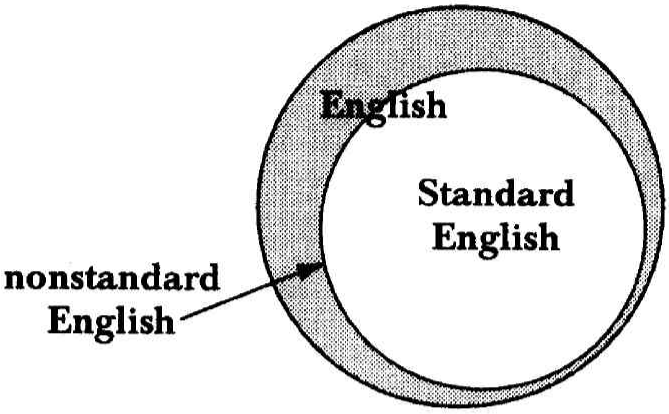
ところで，General English という言い方を多用する場面はどこであろうか。論者の調査[2] では，外国人学生等向けの「海外英語研修」説明パンフレットの中である。そこでは，英米とも一致して General English の教育を目標としてうたっている。

Business English と ESP (Special English) に関連して，論者は「ESP の中心的分野としての Business English の一般的知識の提示と，当該分野（例えばファイナンス）での一定レベルの専門用語の集約」を提案している。これは，社会言語学および言語使用域の議論に通じるものでもある。Business English 側の問題意識の高さについては既に触れたので，ここでは繰り返さないが，Business English の定義そのものについては別の機会に論ずることとしたい。

(3) GE まとめ

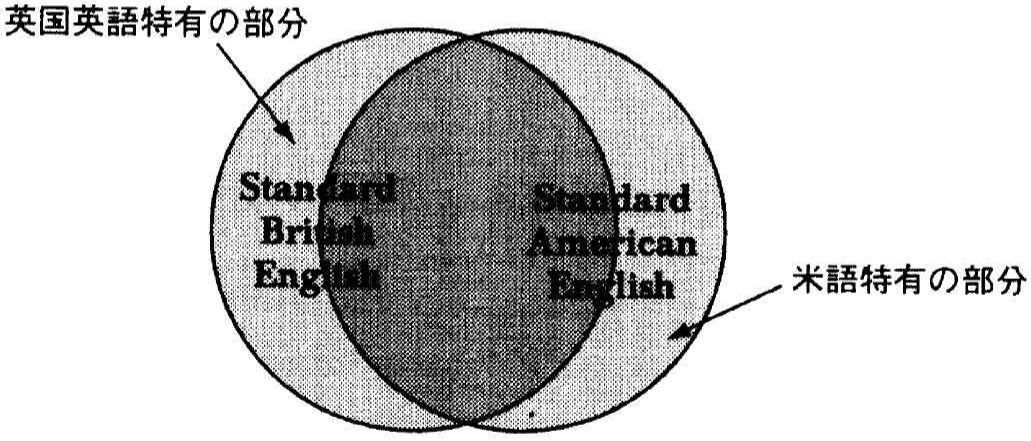
論者による GE の解明の結果を以下の図により示しておこう。今後の課題としては GE の更なる究明，GE と BE の境界域についての具体的事実の積み上げを考えたい。特に，単語のみならず語義 (semantic value) の相違に着目すべきであろう。

図 3-1　English と Standard English の関係



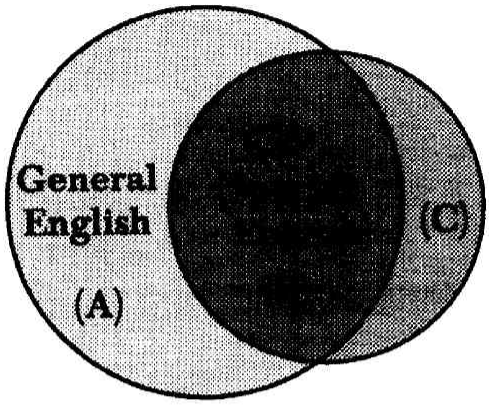
注：English には nonstandard English (= substandard English，俗語，卑語，ain't，irregardless，don't got などの非標準用法等）を含む。

図 3-2　Standard English と Standard American English との関係



注：Standard English は英米等の英語母国語の学校で教える英語で，一般教養人が使う。Standard British English や Standard American English 等と分けることができ，それぞれの歴史，文化を背景に円の大小があり得る。特に発音の相違点が大きい。

図 4　General English と ESP (Special English) の関係



注 1：斜線の部分が GE と SE の境界域。
注 2：GE と SE の共通する部分は，それぞれの SE において GE を使用する部分であり，その種類によって面積の大小がありそうである〔参考文献 (9) *English for Science and Technology: a discourse approach* 参照〕。
注 3：GE は英米で外国人向け教育 (EFL) に使われる表現であるが，米国では Intensive English コースといわれることが多く，GE という表現に英米の差がある得ることを窺わせる。
注 4：SE の代表的な分野である Business English について，*Teaching Business English*〔参考文献 (6)〕では，語彙，表現について，英語の文法や慣用を完璧に心得る必要はないと指摘している。

2. BE から SE へ

― 金融英語の ESP 教育について ―

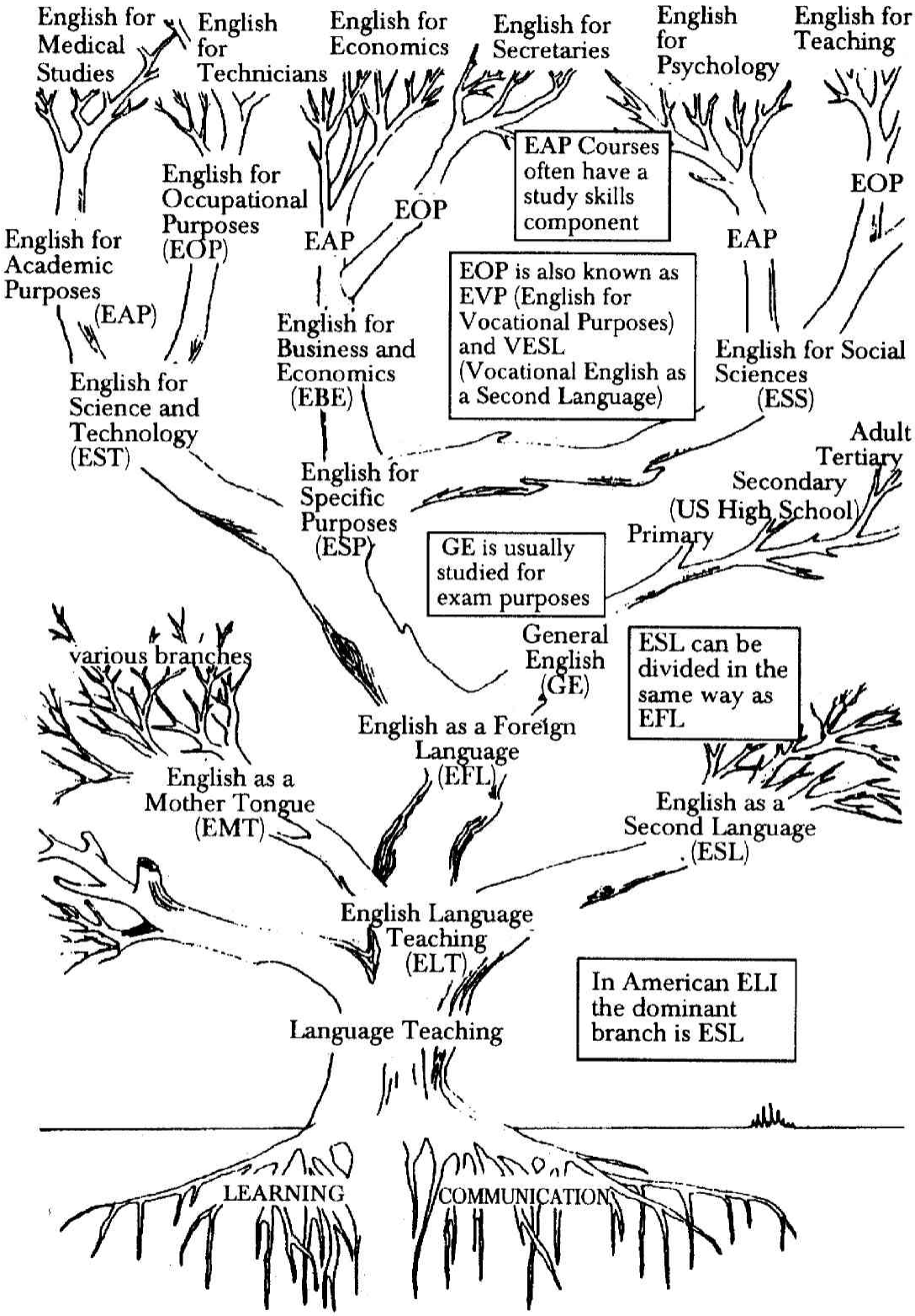
ESP の歴史については，深山晶子 (1997) によるまとめがある。これを参考として，以下に一部を引用しておこう。

実用英語が研究対象となったのは，いつ頃のことだろうか。

過去の実用英語研究を概観して，スウェイルズ (Swales, J.M. 1988. *Genre Analysis,* Cambridge University Press. xiv) は，「100 年ぐらい前から存在している観光英語の表現集や，200 年ほど前から現場では欠かせない航海用のバイリンガル辞書は，実用英語研究の成果というよりも個人的で恣意的 (personal and arbitrary) なもので，本格的な研究は，バーバー (Barber, C.L., 1962. "Some measurable characteristics of modern scientific prose," in Contributions to English syntax and phonology: 1-23, Longmsn.) が科学技術英語の語彙を記述したときに始まった」としている，(「ESP（分野別英語）研究　の誕生」pp.151-152)，とある。

論者は，ここで先ずよく引用される次図（脚注参照）を示しておこう。

Figure 3-1: The Tree of ELT



Note: Tom Hutchinson and Alan Warters. (1987). *English for Specific Purposes, A learning-centred approach.* Cambridge University Press, page 19.

(1) English for Specific Purposes (ESP) の定義

言語学的に正確にいえば，Special English は English for Specific Purposes（特殊な目的のための英語 — 略して ESP）ということになろう。『ロングマン応用言語学辞典』などでは，English for Special Purposes の方を名前として先に挙げている。そのロングマン辞典では，ESP を「コースの内容と目的が，特定の学習者集団の特別な必要性によって定められている言語コースや教育プログラムにおける英語の役割」と定義している。ESP は，しばしば「特殊な英語」とのみ理解されているが，正しくは「特殊な目的のための英語」であり，技術・職業・研究などの具体的な学習目的があり，そのための教育方法に力点があることを指摘しておこう。

ELT (English Language Teaching) の流れの中で ESP が分化した過程については，前出の The tree of ELT が分かりやすい。この図では ESP の枝分かれとして，English for Medical Studies, English for Technicians, English for Economies, English for Secretaries, English for Psycology, English for Teaching などが挙げられている。

(2) SE の分野とその教育

SE の分野については，さまざまなものが示されているが，ここでは 2 つの事例を挙げておく。

(1) *Longman Dictionary of Business English* — 25 field labels

Accounts, Advertising, Agriculture, Banking, Commerce, Commodity exchange, Computers, Economics, Economic history, Economic theory, Finance, Industry, Industrial relations, Industrial safety, Insurance, Law, Management, Marine insurance, Public finance, Quality control, Shipping, Stock exchange, Taxation, Tourism & Transport

(2) *Macmillan Career English Series* — 12 種類

Agriculture(3), Aviation(3), Business — Banking, General Business, International Trade, Computers(3), Engineering(2), Hotel Personnel, Machine(2), Restaurant Employees, Secretaries & Tourism

Longman Dictionary of Business English は 25 の分野別表記をしているこ

とで参考になる。これはビジネスの分野を業種別に分けたものであり，それぞれが専門用語を持っている。すなわち，これは，言語使用域（レジスター）そのものと言っていいだろう。

日本の事例でみると，日経文庫の実用外国語では，業種別に経済英語，工業（技術）英語，商業英語，金融英語，銀行英語，証券英語と 6 種類のテキストを用意している。因みに，日経文庫では 17 種類の用語辞典類を発行している。このように，Special English についてはさまざまな分野が存在する。

(3) 金融 (Banking and Finance) の ESP

金融英語の教本としては，次のようなものが英米で出版されている。

Materials for Language Practice — Bank on Your English, Pergamon Press, 1984

World at Work — Banking, Longman, 1982

Business — Banking, Macmillan Career English, 1984

Instrumental English — English for Banking and Finance, McGraw-Hill, 1983

English for Banking, Accounting & Finance, Berlitz, 1979

Financial English, BBC English, The Economist, 1986

English for Careers — The Language of International Finance in English: Money and Banking, Regents Publishing, 1976

English for International Banking and Finance, Cambridge University Press, 1990

論者は，これまで金融英語の教本として以下のものを刊行している。

「銀行英語の手ほどき」（日経文庫），日本経済新聞社，1985 年。

「銀行マンの英会話」同上，1987 年。

「銀行マンの英文ライティング」三井銀総合研究所，1987 年。

「銀行窓口英会話」DIDAK, 1989 年（テープ 4 巻付き，通信講座）。

「話せる書ける銀行英語」（編著）経済法令研究会，1996 年。

「金融英語の常識」中央経済社，1997 年。

「英和金融用語辞典」（編著）ジャパンタイムズ，1995 年。（含用例）

英米の金融の辞書としては，*Banking Terminology*, American Bankers Association, 1982, *Dictionary of Banking Terms*, Barron's , 1990, *Dictionary of Banking & Financial Services*, Willey, 1985 のほかいろいろあるが，いずれも「用語」辞典であり，ESP 辞典ではない。今後，金融に関連した基本表現や特徴的表現を含むことが必要となろう。

3. GE の再評価

— Business Communication への橋渡しとして —

英国ではたとえば *General and Business English* (1952)（見本下記）なる本があり，かつては GE と BE が混在していた時期があったことを窺わせる。我々は，BE を所与のものとして捉え，その元である GE に関心が薄い嫌いがある。今こそ，BE への橋渡し役としての GE の教育的意義に光を当てる時期ではなかろうか。参考までにその Preface を以下に引用しておく。

> THIS book is intended for students, aged from 14 to 18, who enter commercial schools and colleges to train for positions in offices. It is based on extensive experience in the teaching of English to such students.
>
> Since the rules of *Commercial English* differ in no way from those of ordinary composition, the aims here are: (i) to raise the level of expression among young people whose ability to compose grammatical, lucid, concise and correctly-spelt sentences leaves much to be desired; (ii) to furnish acceptable models of business communications; (iii) to supply abundant exercises for such communications on ordinary subjects; (iv) to accustom students to summarize correspondence, lectures, speeches; (v) to stimulate interest in, and familiarity with words, their derivation and meaning; and, with this object, to impress on the student the importance of acquiring and using a good dictionary.
>
> The author tenders his grateful acknowledgments to all his former colleagues who have helped in the compilation of this book by their co-operation, constructive criticisms, suggestions and material.

(1) ESP 側の GE についての問題意識

実際問題として，GE 抜きで SE の表現をすることは不可能である。ESP では BE もその一分野である。先に示した The tree of ELT では，GE については，EFL(English as a Foreign Language, 外国語としての英語）として示されているだけでなく，'GE is usually studied for exam purposes.' との記載がある。*English for Science and Technology: A discourse approach* (1985, p.6) では，"Although 'General English' is set off as quite separate from the other 'kinds' of English, it is, of course, the mainstay of all fields, whatever the purpose for which the language is used." とした上で，次の表を示している。EST の中に，経済紙，科学・技術記事などで GE を使わなけれは説明できない部分があるという趣旨である。なお，上記の表現の中の fields はレジスターと言い換えることができよう。

English for Science and Technology

English for Academic Purposes		*English for Occupational Purposes*
General English	*EST fields*	*EST occupations*
	Engineering	Engineering technicians
	Forestry	Laboratory technicians
	Computer sciences	Mechanics
	Electronics	Electricians
	Mining	Plumbers
	Medicine	Computer operators
	Dietetics	Etc.
	Nursing	
	Etc.	

(2) 語彙 (vocabulary) 論からのアプローチ

ESP の世界では，語彙 (vocabulary) を次の 4 種類に区分している。
(Tom Hutchinson and Alan Warters, 1987, [165-168] 参照)

① structural: e.g. are, this, only, however
② general: e.g. table, run, dog, road, weather, cause
③ sub-technical: e.g. engine, spring, valve, acid, budget
④ technical: auricle, schistosome, fissure, electrophoresis

分野別英語というと，すぐ名詞や複合語の専門用語を考えがちであるが，必ずしもそうではない。その分野に特有のものの言い方も少なくはない。例えば，change hands という表現がある。これは，一般英語では「<財産などが>持ち主が変わる・他人の手に渡る」であるが，証券英語では「<株式などが>幾ら幾ら売買される」（出来高）という意味になる。

Longman Dictionary of Business English は，分野別表記をしていることで参考になるが，論者の調査では見出し語 9,294 語の中で分野 (25) 表記のある語が 5,615 語，略語が 1,657 語，分野別表記のない語が 2,022 語ある。最後の分野表記のない語は，GE から BE への橋渡しをする役割を果たしていると想定される。

従って，ここでは①この分野表記のない 2,022 語の語彙分析と，②分野表記付きの 5,615 語の一般語義から専門語義への変化の調査を中心に，BE との関連性や Business Communication における役割を検討してみた。

① 分野表記のない語の例（ここでは名詞以外で造語性のある語を中心に選んだ）

above	above par/above the line
across	an across-the-board increase of 5%
blue	blue chip/blue-collar workers/blueprint
clean	clean acceptance/clean bills of exchange [lading]
deep	deep-discount bonds
fair	fair average quality/fair competition/fair trade
going	going concerns/going rates
prevailing	prevailing prices/the prevailing slump
rise	a rise in price(s)/a rise in output [productivity]
safe	safe custody/safe deposit/night safes
secure	a secure investment/feel secure/secured loans
take	take-home pay/take over/takeover

② 分野表記付きの語の一般語義から専門語義への変化の例

Accounts	brought forward （次期〔次ページ〕に繰り越す）
	firstin, firstout（先入れ先出し法）
Banking	90 days after sight（一覧後 90 日払い）
Commerce	back-to-back credit（見返り信用貸し）

Computers	off-line（オフライン処理）, on-line（オンライン処理）
Finance	roll-over（融資借替え，乗換え）
Industry	capital-intensive（資本集約的）
Law	open-ended（中途変更〔調整〕可能な）
Management	cost-effective（費用効果的な，費用に対し最も効果的な）
Stock	at (the) best（もっとも有利な値段で、成行き注文）
Exchange	syn. at (the) market
Transport	door-to-door services（戸口直送サービス）

先に例示した change hands（持ち主が変わる）について，ロングマン辞典は "to pass, or be passed from one person to another, esp. from one owner to another" と説明している。論者が採集した実例では下記がある。

> In 1992, only 65,434 million stocks *changed hands*, only a quarter of the volume generated during the peak year of 1989.

このように，一般用語，すなわち GE を使って（専門用語を使わずに）専門的表現をする事例が見られ，このような表現を GE から SE，BE への橋渡しとして，授業などに採り入れることは，学生にとっても比較的受け入れ易いものとして歓迎されるのではなかろうか。

4. 橋本編纂の三種のビジネス英語辞典と他辞典の良否比較

論者はビジネス英語辞典に関連して，橋本 (1992, 1996, 1997a, 1997b) を公表している。

しかし紙幅の制約上，ここでは主に橋本編纂の三種のビジネス英語辞典 (1991, 1995a, 1995b) の成果の確認と同種の他辞典との良否比較に議論を留めたい。

(1) 橋本三辞典の特長（橋本 1997，pp.115-116）

①『経済英語英和活用辞典』（本文 865 頁）

本著は見出し語 5,257 語，用例 22,765 うち例文 3,458（公表では用語約 5,300 語，用例 23,000）である。この場合は用語は関連・周辺分野も含んでいる。同辞典はビジネス・ファイナンスの両分野にまたが

っているのいで，金融の用語数を特定することはできない。

②『英和金融用語辞典』（辞書の部 582 頁）

その後，1995 年 4 月に刊行に漕ぎつけた本書は用語集ではあるが，見出し語および本文中の用例の中でゴッシック体活字で表示したいわゆる準見出し語を合わせて約 18,000 語を収録している。対象は金融用語を中心に関連・周辺分野約 10 をカバーして網羅性を高めた。

③『英文ビジネスレター文例大辞典』（本文 1076 頁）

一方，②に次いで 10 月に完成した本書は，2 千通のレターを基にビジネスの文例集として編纂され，英文用例を計 15,000 余り収容している。その中で「分野別専門用語」として，ビジネス用語が 24 ジャンルに分けて整理されているが，その語数は 1,688 語である。

これまた，レジスター研究の好事例といってもよかろう。

(2) ビジネス英語辞典の良否比較 (1997a, pp.126 ～134)

比較の対象を，下記 (A) ～ (G) の 7 辞典とした。これで，日・英・米の最近の主なビジネス英語辞典をカバーできた積もりである。(A), (B) は橋本編，(C), (D), (E) は英国系，(F), (G) は米国版である。用例としては，business と finance に関連する表現とした。ビジネスとファイナンスの英語を対象とする以上，この 2 つの用語の選択は公平なものと言えるだろう。

① Business に関連する表現

(A)	M. Hashimoto	*A Dictionary of English Usage for Business and Finance*
(B)	M. Hashimoto	*A Glossary of Financial Terms*
(C)		*The Oxford Dictionary for the Business World*
(D)	Allene Tuch	*Oxford Dictionary of Business English for Learners of English*
(E)	J.H.Adam	*Longman Dictionary of Business English*
(F)	J.V. Terry	*Dictionary of Business & Finance*
(G)	J.M. Rosenberg	*Dictionary of Business and Management (cf. Dictionary of Banking & Financial Services)*

具体的な方法としては，論者編による (A)『経済英語英和活用辞典』の business 関連の表現の中で，他の辞典での採用の有無と，逆に (A) に出ていない事例を個々に抽出する。統計の過程は省略して，結論のみ述べる。

(A) いっしょに使う verb 57, business の adj. 22, 用例 — sentence(full) 20, sentence(part) 9, phrases 22, business+noun/adj. + business 計 13，prep. + business/business + prep., etc. 計　3，合計 146, 総計　180。

(B) ＝橋本編『英和金融用語辞典』　合計　38

(C) 合計　8　　(D) 合計　19　　(E) 合計　32

(F) 合計　5　　(G) 合計　11

② Finance（名詞）に関連する表現

では，専門用語として特化していると考えられる finance（名詞）の方はどうだろうか。論者編の (B)『英和金融用語辞典』を中心に置き，他の辞典について同様の比較を行おう。

(A) 合計　11

(B) 合計　14

(C)　1　　(D)　2　　(E)　11

(F)　1　　(G)　7

Longman Dictionary of Business English は，さすがに用例はそこそこある。いづれにしても，論者の 2 辞典が少なくとも用例の面では，他辞典に比して互角以上の戦いをしていることは間違いない。

なお，橋本 (1995b) は，ビジネスの場面設定（これもレジスター／言語使用域に通じる）を大・中・小項目の 3 段階に分類し，状況・場面別に構成されている。すなわち，「挨拶　1,842 件」，「訪問・会議　1,235 件」，「手配　1,193 件」，「取引　2,063 件」，「契約　1,297 件」，「折衝　1,696 件」，「処置　795 件」，「お礼　1,123 件」，「手紙の決まり文句　2,366 件」，合計 412 項目，13,610 件。「分野別専門用語　1,638 件」，合計 437 項目，15,248 件，内外の類書を圧倒するボリュームである。

5. 国際ビジネス・コミュニケーション
— International Business Communication (IBC)

(1) 国際ビジネス・コミュニケーションの位置付け

国際ビジネス・コミュニケーションについては，The tree of ELT にもあったように，English Language Teaching の基本課題として communication があり，これまで GE，SE(ESP)，BE と論じてきたこともコミュニケーションの問題が基底にある。

論者は，「コミュニケーションのための英語 — 非「英語母語」国民の観点から —」で国際語としての英語，すなわち英米用法のいずれにもあまりとらわれない，許容度の高い英語がビジネス・コミュニケーションの核となることを期待した。

議論のポイントは非「英語母語」国民の側から「英語母語」国民側への

① アングロ・サクソン語源の二語・三語動詞

② 文化的背景から来るイディオム表現

③ 野放図に使われている語彙

④ 文法の中で極めて不規則な部分

の使用制限の提案である。英米人はこの種の提案にまず乗ってこないだろうからわれわれ自身で用語集，用例集，辞書を作ろうとの提案でもある。

(2) 最近の取り組み

論者は，すでに *International Business Communication: Problems and Proposals*（参照文献参照）なる英文出版（「国際ビジネスコミュニケーション－問題点と提案」）を果しており，一部は本稿のまとめである『ビジネス英語　研究と教育』（同じく参考文献に表示）と重複しているので，これ以上の議論は行わない。ただし，最近の取り組みについて若干触れておこう。

前述の①に関連して，論者は 2001 年 10 月の日本商業英語学会全国大会で，「国際ビジネス・コミュニケーションと句動詞の位置付け」について発表した。これは，過去数年の研究発表を整理・集約して，国際ビジネス・コミュニケーションの場では「避けるべき句動詞」として，27 の二語動詞と 47 の三語動詞を選定して，その代案と共に提示したものである。いずれ，文書の形で公表したいと考えているので，参考までに述べておく次第である。例えば，add up に対して total, bargain for に対して anticipate, check up on に対して investigate などを使おうということである。

III. 結論 — 社会言語学と言語使用域

社会言語学は広く言語と社会 (language and society) の関係を論ずる学問である。特に，言語の変種と変化 (language variation and change) が課題となろう。論者の取り組みは，レジスター（言語使用域）の問題を中心とし

たものである。

Holms, J.(1993), Longman.[270] では，“the features of particular registers－the language associated with particular contexts such as finance or science, music, the law, or horseracing とある。(Cf. Ferguson, C.A. (1994. p. 20) ここでも，This kind of variety is a register. と説明している。

1. GE について

General English の一考察 — BE，SE との比較において

GE に関する文献は乏しく，GE という表現は「俗語」扱いである。General English とは，英米とも外国人学生向けの英語研修を指している。また，BE，SE では語義の相違に着目すべきであろう。

2. 専門英語 (BE，SE－ESP) について

Business English から Special English へ — 金融英語の ESP 教育について —

The tree of ELT で ESP の全体像が把握できる。ESP は，「コースの内容と目的が，特定の学習者集団の特別な必要性によって定められている言語コースや教育プログラムにおける英語の役割」である。

ロングマン辞典の 25 の分野別表記は「言語使用域」と言っていい。

General English の再評価 — Business Communication への橋渡しとして —

English for Science and Technology (EST) では，GE は EST を運用する面からも不可欠と明記している。語彙の点では，一般語義から専門語義への変化が注目される。

橋本編纂の三種のビジネス英語辞典と他辞典との良否比較

『経済英語英和活用辞典』，『英和金融用語辞典』とも英米の辞典以上に用例あり『英文ビジネスレター文例大辞典』も圧倒的ボリューム。

3. 国際ビジネス・コミュニケーション (IBC)

「国際語としての英語」をビジネス・コミュニケーションの核として 今後とも推進されるべきであろう。

注

1 Jack C. Richards, John Platt,Heidi Platt, *Longman Dictionary of Language Teaching & Applied Linguistics*, Second Edition, 1992 [125], under heading "English for Special Purposes," also "English for Specific Purposes, ESP."
なお，ここでは参考文献として，Pauline Robinson. *ESP (English for Specific Purposes)*, Pergamon Institute of English, Oxford, U.K., 1980. を挙げている。同書は ESP の初めての網羅的専門書である。Robinson の近著には，ESP Today: A Practitioner's Guide, Prentice Hall, 1991 がある。
日本語版では同上辞典の旧版 (1985) を基にした『ロングマン応用言語学辞典』南雲堂，1988 年 [122] がある。
〔参考〕橋内武「English for Specific Purposes (ESP)」田崎清忠編『現代英語教授法総覧』大修館書店，1995 年 [238～245]

2 橋本光憲「General English 再考 — 海外英語研修の側面からの考察 —」『神奈川大学言語研究』第 10 号，神奈川大学言語研究センター，1997 年 3 月，35-57 頁。
ここでは英・米・加大学が提供する短期 General English Course や中・長期英語研修の事例を紹介すると共に，General English の再考を試みた。内容としては GE 研究，ESP 研究，BE 研究との行きつ戻りつの議論となった。

参照文献ー全般的参照文献

1 Hashimoto, Mitsunori, *International Business Communication: Problems and Proposals,* Hakuto-Shobo Publishing Company, 1998.
2 橋本光憲『ビジネス英語　研究と教育』エルコ，2000 年。
3 同上『経済英語英和活用辞典』日本経済新聞社，1991 年。
4 同上『英和金融用語辞典』ジャパンタイムズ，1995 年。
5 同上『英文ビジネスレターー文例大辞典』日本経済新聞社，1995 年。
6 Holms, J., *An Introduction to Sociolinguistics,* Longman. 1993.
7 Ferguson, C.A., Dialect, Register, and Genre: Working Assumptions about Conventionalization. In Biber and Finegan (1994).

参照文献 — 本論文主体（参照順）

1 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則著『英語教育用語辞典』大修館書店，1999 年。
2 荒木一雄監修，林　哲郎・安藤貞雄著，『英語学の歴史』英潮社新書，1988 年。

3　中田康行『応用言語学の研究－知的連鎖思考からの発想－』晃洋書房，1997年。
4　石黒昭博・中井　悟・龍城正明・高坂京子共著『現代英語学要説』南雲堂，1987年。
5　橋本光憲「General English の一考察 — BE，SEとの比較において —」神奈川大学経営学部『国際経営フォーラム』，平成9年3月。181-204頁。
6　Mark Ellis and Christine Johnson, *Teaching Business English, Oxford Handbook for Language Teaschers*, Oxford University Press, 1994.
7　Department of Education, *English in the National Curriculum*, London, HMSO, 1995.
8　橋本光憲「Business English から Special English へ — 金融英語の ESP 教育について」『研究年報』第 51 号（1991 年），日本商業英語学会，1992 年。19-27 頁。
9　深山昌子「実用英語 — ESP （分野別英語）の研究の誕生」吉田孝夫・中田康行編著『英語学の基礎』晃洋書房，1997 年。
10　Tom Hutchinson and Alan Warters, *English for Specific Purposes, A learning-centred approach*, Cambridge University Press, 1987.
11　J.H. Adam, *Longman Dictionary of Business English,* York Press, Beirut, 1989.
12　橋本光憲「General English の再評価 — Business Communication への橋渡しとして —」『研究年報』第 57 号（1997 年）日本商業英語学会，1998 年。73-82 頁。
13　Stephen Sweet, *General and Business English*, Pitman, London, 1952 & 1959.
14　Louis Timble, *English for Science and Technology:* A discourse approach, Cambridge University Press, 1985.
15　橋本光憲「商業英語を学問として高めるために — 商業英語の用語・用例集編纂の経験を踏まえて —」『研究年報』第 53 号（1993 年），日本商業英語学会，1994 年。131-140 頁。
16　橋本光憲「戦後における実用英語辞典の発展 — ユーザーとして制作策として —」『国際経営論集』第 10 号，神奈川大学経営学部，1996 年 2 月。103-156 頁。
17　橋本光憲「ビジネス用語の一考察 — ビジネスとファイナンスの英語 —」『国際経営論集』第 12 号，神奈川大学経営学部，1997 年 2 月。99-141 頁。
18　橋本光憲「ビジネス英文作成のために — 文例辞典の活用について —」『国際経営論集』第 13 号，神奈川大学経営学部，1997 年 7 月。44 頁。
19　橋本光憲「コミュニケーションのための英語 — 非「英語母語」国民の観点から —」『国際経営論集』第 4 号，神奈川大学経営学部，1993 年 1 月。131-152 頁。